THE FOOD CHAIN

食物連鎖

THE FOOD CHAIN

ジェフ・ニコルスン
宮脇孝雄 訳

Riverside Press
早川書房

Riverside Press

食物連鎖（しょくもつれんさ）

一九九五年一月二十日　初版印刷
一九九五年一月三十一日　初版発行

著　者　ジェフ・ニコルスン
訳　者　宮脇孝雄（みやわき　たかお）
発行者　早川　浩
発行所　株式会社　早川書房
住所　101　東京都千代田区神田多町二-二
電話　〇三-三二五二-三一一一（大代表）
振替　〇〇一六〇-三-四七七九九
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社
定価はカバーに表示してあります　〈検印廃止〉
Printed and bound in Japan
乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

ISBN4-15-206012-3　C0097

食物連鎖

日本語版翻訳権独占
早　川　書　房
© 1995 Hayakawa Publishing, Inc.

THE FOOD CHAIN

by

Geoff Nicholson

Copyright © 1992 by
Geoff Nicholson

Translated by
Takao Miyawaki
First published 1995 in Japan by
Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by
arrangement with
Hodder and Stoughton Limited
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

飲酒倶楽部や社交倶楽部は、みずからの非営利活動に対して、商取引きが円滑になり、高雅な会話からもさまざまな恩恵が受けられることをもっともらしく謳っているが、その手の酒宴に参加したことのない賢明な男なら大半が経験から知っているように、倶楽部なるものの目的は、おおむね悪徳の助長や徒党の推進、愚行の奨励にあり、時間と金銭とを無駄にしてそのような意味のない活動にいそしむくらいなら、それぞれの商売に精を出したり、家族の安らぎの中で寛いだりするほうがはるかにましというものである。

ネッド・ウォード

『倶楽部秘史』

ロンドン、一七〇九年

装幀　和田　誠

何かが忍び込んでくる。ささやかな知覚、虫の知らせ。心で、臓腑で感じ取られた一つの予感。見ると、影の中で蠢(うごめ)くものがある。テーブルにともされたキャンドルの明かりもその影には届かない。ウェイターたちは忍び笑いを漏らす。グラスには口紅の汚れがついている。メニューはきみの読めない言葉で書かれている。値段さえよくわからないが、それは交渉次第でどうにかなる。ワインにはコルクのかけらが、スープには蠅の死骸が入り、ウェイターの指はきみの喉仏にかかろうとしている。

頭は眩暈がするほど軽いのに、胃袋は重い。料理のせいだろうか？　何か相性の悪いものを食べたのか？　きみは財布を出そうとするが、見当たらない。とりあえず、うろたえるなと自分にいいきかせる。この店ではちょっとした顔なのだ。きみには信用がある。少なくとも以前はそうだった。今はどうだろう。営業方針や経営者が変われば、同じようにはいかない。きみは飲み物が欲しくなる。冷たい水が欲しくなる。妙に息苦しい。きみは胸焼け、吐き気、消化不良、船酔いに襲われる。

海は陸地に口づけをして、浜の欲望を鎮める。小石に当たって砕けながら、岸辺を抱いて愛撫する。さあ、胸襟を開きましょう。そして、口を開き、膀胱を開き、肛門を開くのです。私たちは水門を開け放つ。下水溜めの栓を抜く。汚物は流れ出て、肉汁のように私たちを取り囲む。われわれは自分が摂り込んだものをひりだしているだけだ。だが、これは単なるエコロジーの問題ではない。

きみはそんな言葉しか使えないのか。表現はほかにもある。第三世界。失われた世界。死にゆく世界。おこぼれをあてにしながら、よそのテーブルの余り物や生ゴミにすがって命をつなぐ者もいる。爪に火をともすようにして生きてゆく世界もあれば、腹を膨張させて死んでゆく世界もある。おあいにくさま。クッキーはぼろぼろ崩れるもの。絵に描いた餅は食えない。金を持っている連中はいうだろう。これは単なる金の問題ではない、と。

暗喩(メタファー)が次々に消費される。セックスと死。堅い肉。貪

欲な飢え。肉の交換。身体の経済学。あなたが何を食べるかで性格がわかる。おもむろに神も登場なさいます。聖体と聖血。パンとワイン。肉と聖霊。「ウェイター！これは私の注文した料理じゃない。私が欲しいのはパンだ、魚だ、ワインに変わった水だ、聖餅（ウェファー）だ、豚肉だ。料理長を呼べ、経営者を呼べ、もっと偉いやつを呼べ……」

ある者は、ちびちびと食物を口に運ぶ。いいかえれば、小鳥のように食事をする。またある者は、馬を一頭たいらげられるほど、砂糖ネズミの巣さえ食べられるほど、キャンディの山でも崩せるほど、腹をすかせている。拒食症や大食症の患者がレストランの窓を覗きこむ。肥満した人間と痩せ細って飢えた人間。生のものと煮られたもの。いわく、飢餓問題はファッションなり。またいわく、金持ちを餌食にせよ。人民の膏血を搾る富裕階級は人間の皮をかぶった狼であり、傾きかけた屋台骨に寄りかかって、余剰物資や食糧の山、刈り取り損ねた収穫物を消費している。飢えた百姓の中には太った資本家が潜み、隙あらば表に出ようとしているのです。機会さえあれば。手段さえあれば。

われわれは新しい味、新しい血を求めている。想像力を刺激し、食通の味覚を刺激する不思議な調味料を求めている。健康な精神は健康な顔に宿る。病気の精神は死体収容袋に納められた肉体に宿り、砂糖と赤身肉、精製された白いパンと飽和脂肪酸に宿るのであります。

これを食べればきみは男になれる。胸毛が生える。霧の中でも物が見えるようになる。禿げになる。これは後天的な味覚である。くずを食べないでいようとすれば、高い代償を支払わなければならない。ある種の基準、サービスと礼儀作法の基準が要求される。それは決して安くない。自由貿易に代償はつきものだ。

私たちは文明国の人間である。セックスが子孫繁栄のためにあるわけではないように、食事は飢えを満たすためにあるわけではない。それは知識の探求ではなく、快楽の探求なのだ。禁断の果実などというものはない。金あるところに道は開ける。大魚は小魚を食らう。犬は犬を食う。金で買えないものもあるが、それはわれわれのメニューには並ばない。たとえば熊の掌（て）。山椒魚の目玉。お菓子の家。癇の虫。二本脚の羊。そして、カマキリ。

1

ファースト・クラスのキャビンで、彼は死んだ空気を呼吸していた。ゆったりした柔らかいシートだった。窓の外には雲しか見えない。シャンペンのお代わりを注文し、スチュワーデスがそれを持ってくると、彼は尋ねた。

「きみ、カマキリに詳しい？」

「いいえ」スチュワーデスは笑顔で答えた。

「つまりね、こういうことなんだ。雄のカマキリと雌のカマキリが出会う。おたがいにルックスが気に入って、どの星座の生まれか、どんな映画が好きかなんて話をしたあと、彼女の部屋へ行くことになる。森の中の小さなすみか。派手な家じゃなくて、質素なところなんだ。二人で少し酒を呑んで、子供のころの思い出話をしたあと、いよいよセックスが始まる。雄のカマキリは上機嫌になっている。やったあ、という征服感があるんだね。しばらくのあいだは、それこそいうことなし。雌の体にさわると、相手もさわりかえしてくる。情熱はどんどん高まってゆく。そのとき、雌のカマキリが、雄の頭を噛みちぎるんだ。これには彼もびっくりさ。だけど、死ぬ間際には、ちゃんとオルガスムスに達することができるし、しばらくすると、雌は二百個ぐらいの卵を産む。何がいいたいかというと、ぼくはろくでもない女と付き合ったこともあるし、きんたまが潰れるほどひどいめにあわされたこともあるんだけど……」

相変わらずスチュワーデスはにこやかだったが、その笑いは今にも崩れそうなもろいものに変わっていた。冷ややかに彼女はいった。「どうしてそんな話をなさいますの？」

「いやあ、ただ不器用に切り出してるだけさ。ぼくとファックしないかって……」

「すけべなことをおっしゃるのはおやめなさいませ」と、スチュワーデスはいった。

「ちょっと待ってくれ」と、彼はいった。「別に頭を噛みちぎってくれといってるわけじゃないんだよ」

座席にすわったまま、ひとり腹を抱えて笑ったので、塩をまぶしたナッツと呑み物がズボンにこぼれた。笑い

がおさまるには時間がかかった。次にそばを通ったとき、健忘症にかかったのか、スチュワーデスは平然と尋ねた。

「お呑み物のお代わりはいかがでございますか」

これだからファースト・クラスの旅は楽しいのだ。手足を伸ばせる広々とした空間があるし、どうにか口に合う程度の食事も出て、酒は呑み放題、スチュワーデスにいやらしい話をしても、にこやかな笑みとサービスを絶やさず、敬語を使って話しかけてくれる。

とにかくのんびりくつろごうと思い、雑誌でも読むことにした。だが、できなかった。彼はアルマーニのスーツから塩豆のくずを払い落とした。スーツの下にあるのはジャクスン・ポロック（アメリカの抽象画家）風の模様がついたTシャツで、はいているのはズック靴だった。ヘッドホーンをつけてみたが、気に入った番組はない。結局、お代わりを頼むことにして合図を送った。

ヴァージルは、そろそろ三十に手が届く年ごろだったが、見かけも振舞いも実際の年齢より幼かった。アメリカじゅうどこへ行っても人気があるロック・スターのように見えないこともない。夜行性で、剣呑で、痩身で、いつも二日酔い。ひげの剃り残しが多く、髪は脂染みて、手も汚れている。ヴァージル自身よく知っているように、そんな格好に魅力を感じる女もけっこう多い。

これまでに彼は一度しかイギリスに行ったことがない。何年も前の、大学時代の夏休みに出かけたのだが、そのときも見物したのはロンドンだけだった。しかも、さんざんな目にあったという記憶しか残っていない。泊まったのはブルームズベリーの安ホテルで、一週間滞在した。それだけいても地下鉄の乗り方さえ理解できず、向こうの連中がしゃべる言葉はちんぷんかんぷんで、今と違って食べ物の好みもそれほどうるさくなかったが、丸一週間のあいだに出された食事のうちで口に合うものは一つもなかった。ロースト・ビーフやステーキ・アンド・キドニー・パイで何度か失敗したあと、昼間は輸入物の果物だけを食べ、夜は安直なイタリア料理店に通いつめて飢えをしのいだ。最初は一か月イギリスに滞在する予定だったが、意思の疎通ができず、ひどい食事に悩まされ、小糠雨ばかり降る灰色の空にも愛想をつかし、七日間いただけでギリシャに向かった。ギリシャのほうは、故郷のカリフォルニアにそっくりで、親しみを覚えた。

お代わりが届いた。スチュワーデスがまた笑顔をふりまく。ヴァージルはシャンペンをがぶ呑みした。そして、紙入れを取り出し、招待状に改めて目を通した。角が丸

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

くなった分厚い純白のカードに、イタリック体の手書きの文字が入っているところは、いかにも品がよかった。

英国ロンドンの永遠倶楽部に慎んでご招待いたします。いかなる時刻でも昼夜を問わずお迎えにあがります。上等な食事、香り高い酒、気のおけない談話をお楽しみください。費用はすべてわたくしどもが負担させていただきます。

おかしなことに、クラブの所在地は書かれていなかった。しかも、カードの上の部分には、浮き出し印刷で不思議な紋様が描かれている。自分の尻尾をくわえた蛇の図柄だ。ヴァージルは少し奇異に思ったが、それほど不審がっているわけではなかった。招待状にはファースト・クラスの往復チケットとホテルの予約票が添えられていたので、深く詮索するつもりもなかった。これといった用事はなく、暇だけはあったので、すぐ飛行機に乗った。永遠倶楽部というのは初めて聞く名前だったが、先方が彼の名前を知っていても不思議はない。ヴァージルは一種の有名人だった。ロサンゼルスで最先端のレストランを開き、ロサンゼルス料理界の〈恐るべき子供(アンファン・テリブル)〉と呼ばれてきた男なのだ。招待状が舞い込むのはいつものことだったし、その招待を断らないのもいつものことだった。

ヴァージルは、税関・入国審査の窓口を飄々と通り抜けた。パスポート・コントロールの男が尋ねた。「こちらにはお仕事で？」

「ぼくがビジネスマンに見えるかい」

「では観光で？」

「まあね。場合によっては、誰かがぼくに物を売りつけようとするかもしれないが、こっちとしては何も買うつもりはない。ここには楽しむためにきたんだ。そんなところでいいかい？」

男は手を振って彼を通した。緑色の通路をとおり、自在扉を開け、現実の世界に一歩足を踏み出す。人待ち顔の群衆が目に入った。柵の向こう側で待たされている人々。専用車の運転手やタクシー・ドライバーが、名前のついた札を掲げている。ダ・シルヴァ様、マクレノン様、マーケイジ様、お馬鹿(ブ)様。その中の一人が〈マーセル様〉という札を持っていた。ヴァージルの苗字だ。

名札を持っている運転手は、四十がらみの真面目そうな黒人で、なかなか威厳があったが、少し気が弱そうに

見えた。途方に暮れたような情けない顔をしている。こめかみのあたりに白髪が目立つ。身につけているのは運転手の制服ではなく、光沢のある青いスーツで、芥子色の短靴をはいていた。
「マーセルだ」と、ヴァージルは運転手にいった。「よかったらヴァージルと呼んでくれ」
「おそれいります」
今日はみんなが彼に敬語を使う。
「で、きみの名前は？」
「バターワースでございます」
「おや、そうかい。ぼくの国じゃ、バターワースなんて名前にはめったにお目にかからないけどね」
バターワースは何もいわなかった。
彼はヴァージルを車に案内した。リムジンではなく、黒塗りのメルセデスのセダンだった。カクテル・バーもテレビもない。ヴァージルはバターワースと並んで前の席にすわった。
「きみのファースト・ネームは？」ヴァージルは尋ねた。
「ヴィンスでございます。よろしければバターワースとお呼びください」
「でもね、人間はみんな平等だから」
「お気遣いは無用でございます」
バターワースは脇目もふらず上手に車を運転した。何よりも仕事第一だと考えているのだろう。重厚なセダンは揺れることもなく道路を走った。ヴァージルはほかの車を見ていた。どれも小さく、まがまがしく、まるでネズミのようだ。やはりここはイギリスなのだ。疲れが取れず、酒も抜けない。時差ぼけのせいだろう。もう一杯呑まなければ、と思った。
「それで、行く先はどこなんだ、バターワース」
「ホテルでございます。シャワーや着替えのご都合もあろうかと存じますので。よろしければ、しばらくお寝(やす)みになってください。おっしゃっていただければ、永遠倶楽部へはいつでもご案内いたします」
「つまり、門限はないってことか」
「そのとおりでございます。永遠倶楽部へはいつでも行くことができます」
「だけど、バターワース、そいつらは何者なんだ？」
「そいつら？」
「永遠倶楽部さ。聞いた感じは宗教団体だが」
「いいえ、わたくしの存じ上げるかぎり、宗教とは何の関係もございません」

「じゃあ何だ。普通のナイト・クラブか？」
「いえいえ、それは違います」
「だったらどんなクラブだ。何をしている？　どうしてぼくが招待された？」
「わたくしにはわかりません。ご承知のように、ただの使用人ですので」
「つまり、のんびりかまえて、ミステリ・ツアーを楽しめばいいわけかい？」
バターワースは、つい頬を緩めそうになり、改めて道路に神経を集中させた。
「まあ、いいか」と、ヴァージルはいった。「こっちには関係ないもんな。無料で酒が呑めるなら、どこへだって行くさ」
「一つだけ申し上げておきたいことがございます」と、バターワースはいった。「永遠倶楽部においでの際は、ブラック・タイを着用していただきたいのです」
「やばい。タキシード持ってこなかった」
「それでしたらご心配なく。ホテルの部屋にディナー・ジャケットが吊してあります」
「こりゃ驚いた。ぼくのサイズを知ってるのか？」
「調べる手だてもあろうかと存じます」

ヴァージルはいった。「食事の前に特別な格好をする習慣は、ぼくには理解できないね。セックスの前に特別な格好をする連中もいるらしいが、それもおかしな話だ。きみには理解できるかい、バターワース」
「晴れの場に臨んでいるという心がまえができるのではないでしょうか」
「なるほどね。まあ、いいか。こっちはただの招待客だ。お望みどおり、仮装でもなんでもしてやろう」
間もなく二人はロンドンの中心部に入った。ヴァージルには右も左もわからなかった。やがて、ホテルに着き、部屋に案内された。一般の部屋と比べて、かなり豪華なところだった。革張りのソファーがあり、卵と矢じりの形を組み合わせた刳形模様や襞飾りがふんだんに使われ、部屋の色調はクリーム色と薄い灰色に統一されている。たくさんの花があり、フルーツが満載された大きな皿もあった。ヴァージルがベッドの大きさを確かめていると、飛行機に続いて今度もまた無料のシャンペンをウェイターが運んできた。ベッドはキング・サイズだった。
そのあと、ルームサービスに電話をかけ、グラヴラックス、うずらの卵、ラディッチオとチコリのサラダ、オリーヴのアンチョヴィ詰め、ライ麦パン、グアカモーレ、

ナーチョ・チップスを注文した。お手並み拝見のつもりだった。感心なことに、注文したものはみんな届いた。もっと感心したのは、どれもすぐに運ばれてきたことだ。

次に、ディナー・ジャケットを着てみた。サイズはぴったりだった。なるほど、こいつらはきちんと下調べをしている。ボウタイには難渋したが、バターワースに頼めば面倒がらずに結んでくれるだろう。シャワーを浴びようかとも思ったが、それは、まあ、時間の無駄だ。とにかく、今は出かけたかった。なんだかわからないが、永遠倶楽部に早く案内してもらいたかったのだ。いったい先方は何を考えているのだろう。

フロントに電話をして、二、三分で下りてゆくと、バターワースへの伝言を係の女性に頼んだ。バターワースは、背もたれの高い肘かけ椅子に窮屈そうにすわり、辛抱づよく待っていた。ヴァージルの準備ができるまで、必要があれば朝までででもじっと待っていたに違いない。ヴァージルが下りてゆくと、バターワースはボウタイを結んでくれた。そのあと二人は外へ出て車に乗った。

「実はもう一つ規則がございまして」バターワースは決まり悪そうにいった。

「え？」

バターワースは旅客機で使うアイマスクをヴァージルに手渡した。

「これをどうするんだ」

「おつけになってください。ご面倒でしょうが、向こうに着くまで目隠しをしていただきたいのです」

「本気かい？　どうも本気みたいだな」

「恐縮でございます。要するに道順を秘密にしておきたいのです。こういう規則でございまして」

「道順？　憶えられるわけないだろう。ロンドンの街は右も左もわからないんだし、知ってる場所は、セント・ポール寺院とトラファルガー広場を除いたら、イタリア料理店一、二軒くらいのもんだ」

「とにかく規則でございますので」

付き合いきれないやつらだ、と思ってヴァージルは冷笑を浮かべたが、とにかくアイマスクをつけることにした。車に乗り込んでも目の前は真っ暗だった。そのときになって、おれは誘拐されるんじゃないか、という思いが初めて頭をよぎった。あの招待状も、ホテルの部屋も、バターワースも、どこかの秘密結社、たとえば中東の原理主義者あたりが仕組んだ罠なのではないか？　ヴァージルの父がちょっとした金持ちであることは、一部では

よく知られている。自分の後継者でもある一人息子を無事に救出するためなら、親父は気前よく金を出すはずだ、とヴァージルは希望的観測をした。あとは、交渉が長引いて、そのあいだに洗脳されたり屈辱的な目にあわされたりしないことを祈るだけだった。むろん、本気で誘拐されると思っていたわけではない。それどころか、冷静にこんなことを考えていられるくらいだから、まあ、大丈夫だろうと思うようになってきた。

座席にすわったままじっと耳を澄ませていると、エンジンの音やタイヤのきしみが聞こえてくる。腰の下のシートはびくともしない。意外なほど不安はなかった。

彼はバターワースに話しかけた。「ところで、きみのアクセントは、どの程度のものなんだ?」

「程度と申しますと……?」

「上流階級か、もっと低い階級か。きみたちイギリス人には、そういうことが大事なんだろう? おまけに、きみは黒人だし……」

「勝手な感想をいわせていただければ、近ごろでは、言葉のアクセントより、話の内容のほうが重視される傾向にあるようでございます」

「おや、そりゃめでたい」

「ですが」と、バターワースは続けた。「わたくしのアクセントはごく普通のものだと思います。ほんの少しジャマイカの訛りが入っておりますが、ロンドンでは一般的なアクセントでしょう」

ヴァージルはいった。「きみたちイギリス人のしゃべり方は、みんなチャールズ皇太子みたいだね」

そのとき、ヴァージルは気がついた。もしも本当に誘拐されているのだとして、ロンドンの街なかから自分を拉致したテロリストたちの特徴をあとで訊かれたときに、これでは少し困るのではないだろうか。「ところが、刑事さん、そいつらはみんなチャールズ皇太子みたいなしゃべり方をしていたのです……」

十五分ほど走って車は停まった。ということは、まだロンドンの中心部にいるのだ。バターワースはエンジンを止め、車から出ると、ヴァージルの側に回って扉を開けた。ヴァージルは目隠しされたまま外に出た。そして、バターワースに腕を取られ、舗道を横切って、鉄の門をくぐった。バターワースがその門を開け閉めした。それから二人は、四歩くらいで終わる短い砂利道を歩き、五、六段の階段をあがった。バターワースが玄関の呼び鈴を鳴らすと、ドアが開いた。「わたくしがお供できるのは

ここまでございます」バターワースがそういったので、ヴァージルは二歩前に進み、敷居をまたいで中に入った。ワックスの匂いと、遠くから漂ってくる濃厚な料理の匂いを鼻に感じた。ニンニクと、タラゴンと、猟鳥の匂いだ。背後でドアが閉まった。

ヴァージルはアイマスクをはずし、照明がまぶしくて、何度かまばたきした。バターワースの姿はなく、鏡板が張られた玄関ホールにヴァージルは一人で立っていた。ホールはいくつかのドアに通じている。真鍮のノブがついた大きくて頑丈そうな木のドアだったが、どれも閉まったままだった。そのドアの向こうから、複数の男の声が聞こえていた。静かに話し込んでいるような声も聞こえたし、遠くで叫んだり笑い転げたりしている声も聞こえる。いっそのこと、どれかを開けて乱入してやろうか、とヴァージルは思った。やあ、みなさん、こんにちは、だ。しかし、どれを開けるか選びかねているうちに、ドアの一つがほんの少しだけ開き、丸々と太った禿げ頭が顔を出して、愛想よくヴァージルに笑いかけた。

「ヴァージル・マーセル！」禿げ頭の主は熱烈な挨拶をした。「よく来たなあ！　いやあ、ほんとに嬉しいよ！」

男は玄関ホールに出てきた。禿げた頭と太った体に欺かれてはいけない。実際には、ヴァージルと同じくらいの年格好だろう。顔にはしわ一つなく、薄紅色につやつやと輝き、まだ人生の垢もついていない。ただし、暴飲暴食のせいか、贅肉がつき、鼻の頭が赤らんでいる。老人のようにも見えたし、青年のようにも見えた。童顔のでぶだ。

「私はキングズリー」と、男はいった。「ジョン・キングズリーだ。永遠倶楽部の饗宴長をつとめている。快く招待を受けてもらって感謝してるよ。みんな大喜びだ」

「ホテル代も飛行機代もそちら持ちだからね」と、ヴァージルはいった。「断れると思うかい？」

「まあ、そうだろうな。とにかく、入りたまえ。一杯やろう」

ヴァージルは、このキングズリーという男がすぐに嫌いになった。その理由は、でぶで禿げているから、というだけではない。もちろん、ヴァージルの仲間うちでは、それだけで嫌われることも多かったが、この男の場合は、ほかにもいろいろ気に入らない点があった。たとえば、金持ち風を吹かせているところ。慇懃無礼に人を見下しているところ。妙に口が達者なところ。いかにも魅力た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.